

ビーカー土器考

——イギリス青銅器時代のはじまり——

はじめに

イギリス^①は最後の氷河期にはヨーロッパ大陸と陸続きであったが、後氷期の海進によって紀元前六千年紀頃に島国^②となった。その後、この地には巨石を用いた長形墳 Long Barrow、防禦的集落 Causwayed Camp に特徴づけられる独自の新石器時代文化が栄え、土器は無文丸底土器を主とする段階 Hembury Ware、Windmill Hill Ware から、有文丸底土器を主とする段階 Ebbsfleet Ware と変化した^③。

次いで紀元前三千年紀に大陸から平底の土器であるビーカー Beaker が伝わりとともに金属器（金、銅、青銅）を使用するようになったが、この変化は石器、装身具、葬制の変革を伴ない、おそろくは John T. Pigott の示すように民族・階級の形成、

宇野 隆 夫

文明社会との交渉という大きな問題と関るものであったであろう^④。ただしすべてが大陸風になったわけではなく、新石器時代の系譜をひく土器 Moltrake Ware, Grooved Ware、円形住居のようなものも存在する。このイギリス青銅器時代前期の文化は、新石器時代の文化が独自に発展して形成しえたものではない反面、すべてを大陸文化の伝播によって説明できるものでもない。

本稿ではイギリス史上の重要な変革期と目される金属使用開始期の動向を知るため、先学の研究成果に依拠しつつ基本となる土器 Beaker の編年と分布の変化を中心とする考察を行ないたい^⑤。またビーカー期、特に鐘形ビーカー期を新石器時代とするか青銅器時代とするか、及びビーカー使用民については諸説があり、若干の検討を加えることにする。

① 大ブリテン島とこれに付属する島嶼。

② イギリスとヨーロッパ大陸との断絶はC年代測定によってB. P. 七八〇〇年頃に比定されている。

I. G. Simmons, 'Sea Level', *The Environment in British Prehistory*, London, 1981, pp. 83-89.

③ S. Pigott, "The Neolithic Cultures of the British Isles", London, 1954.

I. F. Smith, 'The neolithic', *British Prehistory*, London, 1974.

④ 前三千年紀末とする説と前三千年紀中頃とする説とがあり、第二章で検討する。

⑤ S. Pigott, "Ancient Europe", Edinburgh, 1965, pp. 106-107.

⑥ 日本で、ビーカーをとりあげたものとして次の二書がある。特にヨーロッパ全般の事に関しては後者に詳しい。

有光教一「鐘形杯文化」『世界考古学大系』第二二巻、一九六一年

角田文衛『石と森の文化』沈黙の世界史第五巻（一九七一年）

一 ビーカーの用語と研究史

ビーカーの名称は、その名が示す通り、特定の深鉢形器種の器形に由来する。①その最古のものは、口径が胴部最大径の位置で屈曲し口頭部がゆるやかに外反する点でビーカーと呼ぶのにふさわしいが、次第にビーカー形から離れていく（第六図）。またこの深鉢のほか用途を異にするいくつかの器種がある（第四図）。そのためビーカーの精緻な集成を行なったデビット・クラーク D. J. Clarke は、深鉢形以外の器種も含めて、ビーカー土器

Beaker Pottery の呼称を用いた。②私は、土器は各種の食器の組

合わせを把握する様式研究から出発するべきであるとする立場と

ビーカーの用語が、広く用いられている点とから、クラークに従

い、深鉢形の器種、及びそれと組合わせて用いた土器の総称とし

てビーカー土器（以後「ビーカー」と略す）の用語を用いたい。そ

して深鉢形の器種は、ビーカー深鉢B類のように呼ぶことにする

（第四図）。

ビーカーはヨーロッパに広く分布し、また西ヨーロッパ③におい

ては最古の金属器を伴なうことから、多くの研究者の注目を集め

た。そしてその起源、分類と編年、分布の意義等について非常に

多くの論考がなされているが、ここではビーカーの起源論をまと

めたハリソン R. J. Harrison の研究等④に依り、イギリスを中心

にして主要なものを示すことにする。

古く一八七一年の時点でサーナム J. Thurnam はイギリスの

円形墳 Round Barrow からビーカー Drinking Cup が浅鉢形

土器・青銅器・玉製品と共に出土することを明確にし、この深鉢

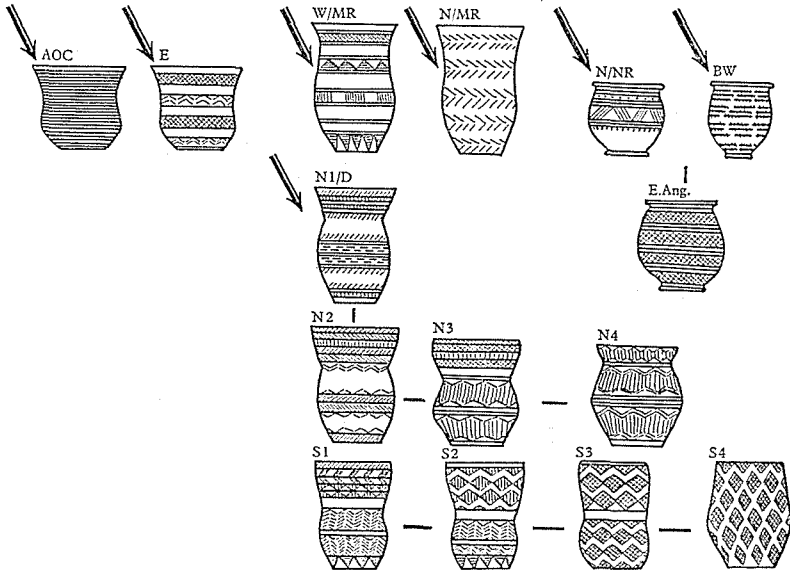
形土器を α （長頭形）、 β （鐘形）、 γ （短頭形）の三群に大別し

た。⑤これを受けたアバークロンビー H. J. Abercromby は最初

の本格的な集成を行ない、分類をA、B、Cと呼び換えるとともに

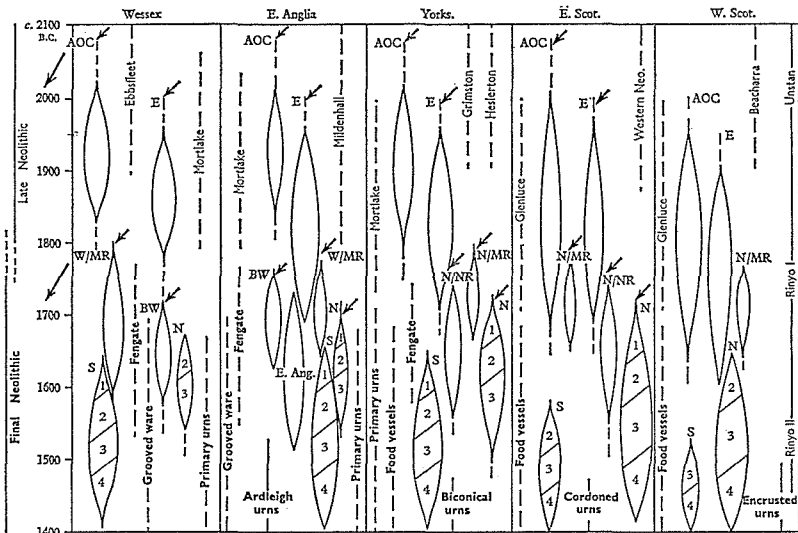
に、さらに細別し、分布の違いを論じたが、この最初に設定され

ビーカー土器考 (宇野)



第1図 イギリスビーカーの群別。

(矢印は、侵入した群であることを示し、ダッシュは三つの在地的变化の系列を示す。年代は左上が古く、右下が新しい。D. L. Clarke による。)



第2図 イギリスにおけるビーカーの地域別編年図

(矢印は侵入した群であることを示す。D. L. Clarke による。)

た三大別は現在でも有効性を失っていない。ただし編年についてはビーカー（鐘形ビーカー）が古い型式であることをチャイルド V. G. Childe が指摘した。^⑦

このビーカーに関する初期の起源論の主なものとしては、モンテリウス O. Montelius のエジプト起源二径路伝播説^⑧、パリアルディ J. Palliardi のイベリア・中央ヨーロッパ二元説^⑨、カスティロ A. Del Castillo のイベリア起源説^⑩がある。このうちカスティロのイベリア起源説が有力となったが、それはイベリアにおいて東地中海の文明社会の影響を受けたと推測される稜堡のある防禦的集落が発掘され、金属器出現の系譜を説明しやすくなったからである。

しかしビーカーの資料が増すとともに、土器の縄文施文、鬮斧、横臥屈葬墳墓のように中央ヨーロッパの系譜をひく要素が多いことが明らかになった結果、ザングマイスター E. Sangmeister は逆流理論を提出した。^⑪ 逆流理論とは、イベリア起源のビーカー文化が大西洋岸沿いに東進して中央ヨーロッパに至り、その文化と複合して後に逆流し、イベリア・イギリスに至ったとするものである。

この説は多くの支持を得たが、現在ではビーカーの編年研究が進展したことによって、異なる説が有力となっている。すなわち

縄文を施した鐘形ビーカーが最古の型式であることが明らかになり、中央ヨーロッパ西部（オランダ）における新石器時代の繩文土器 Local Corded Ware: Protruding Foot Beaker から鐘形ビーカーが生まれたとする説が最も説得力をもつようになってくる。そこで基本となり本稿で最も問題としたい編年研究について非常に大きな役割を果たしたクラークの研究成果をやや詳しく紹介したい。^⑬

クラークは従来の研究が不十分な集成に基づき、また器形による分類に偏していたことを批判した。そしてイギリス出土のビーカー一九四四点（約八〇〇点が完形品）を集成し、器形・法量について二三項目、文様の表現位置（器面区画）について六項目、単位文様の組合わせについて一〇項目の観察項目を設定し、項目別の分析を行なった。次いでこの三九項目すべてを、おそらくは数量化三類のプログラムを用いてコンピュータで解析し、群別を試みている。そしてこの結果と、変化の系列・地域性・大陸ビーカーとの関連を考慮して十五型式を設定した（第一図）。これらの型式名のうち、AOC は全面縄文施文、E は汎ヨーロッパ、W/MR はウェセックス/ライン川中流域、N/MR はイギリス北部/ライン川中流域、N/NR はイギリス北部/ライン川下流域、BW は結節縄文、N₁/D はイギリス北部1/オランダを表わし、

大陸に類例があることを示す。このようなやや難解な型式名が付された理由はクラークが、これら各型式は大陸からの渡来民によってそれぞれ独立してたらされたと考えたからである。また $N_2 \sim N_4$ はイギリス北部、 $S_1 \sim S_4$ はイギリス南部、 $E \cdot A \cdot n \cdot g$ はイギリス東南部を表わし、その細別はイギリスにおける在地的変化と考えている。

次いでクラークは各型式について、器形・文様の主な特徴、口縁部や底部・胎土等の特徴、例外的な資料、集落における共伴土器、分布、出土遺構と土器以外の共伴遺物、起源と変化、相対・絶対編年(土器編年と¹⁴C年代)を詳しく述べた後、各型式の年代的・地域的位置づけを行なった(第二図)。

このクラークの秀れた編年研究は、オランダにおけるビーカー研究者の認めるところとなり、^⑤現在に至るまではほぼ定説となっている。本稿においても、これに依拠する所が大きい私が意図したいことは二点ある。第一点は深鉢形ビーカーの型式分類を行なう前に器種構成と各器種の用途を検討したいことであり、第二点は型式名を変更したいことである。型式名の変更は無用の混乱を生む可能性もあるが、これをこなうのは以下の理由による。

クラークは分析の結果、それまでの器形によつた型式分類を批判し、器形よりもむしろ文様における器面区画と単位文様、とり

わけ単位文様の組合せが重要な編年の基準となることを示している。^⑥私は文様の分析が型式の細別に有効である点については異論がないが、器形による鐘形・短頸形・長頸形の三大別は今でも非常に重要な意味を持っていると思う。すなわち鐘形ビーカーは汎ヨーロッパ土器圏をなした古い土器であり、短頸形・長頸形ビーカーはそれぞれイギリス北部・南部に分布する新しい地域的土器である。また鐘形ビーカーの諸型式は個別にイギリスに至つたとするより、ファンデルバルス J. D. van der Waals の示すように一連の変化をとげた型式とみなしたい。そして本稿では金属器文化の中心地となつたイギリス南部を中心とする考察を行なうため、鐘形ビーカーをⅠ式、長頸形ビーカーをⅡ式とし、それぞれを細別する方針をとることにする。

なおビーカーを使用した人々 Beaker Folk についても多くの論考がなされているが、これについては最後に触れることにしたい。

① ビーカーの名称を最初に用いたのはアバークロンビーであらう。それは盛皿 Food Vessel と区別し、飲器 Drinking Cup と呼べた。なお本稿ではこの古い名称の意義も重視した。

H. J. Abernethy, "A Study of the Bronze Age Pottery in Great Britain and Ireland and Its Associated Grave Goods", Oxford, 1912.

② D. L. Clarke, "Beaker Pottery of Great Britain and Ireland", Cambridge, 1970.

⑨ 西ヨーロッパはイギリス・ノールランド・ノルマン・スウェーデン・ポルトガル、中央ヨーロッパはオーストリア・ドイツ・チェコスロヴァキア・ポーランド・ポーランド、東ヨーロッパはハンガリー・ルーマニア・ブルガリアの意味で用いられる。

J. M. Coles and A. F. Harding, "The Bronze Age in Europe", London, 1979.

⑩ R. J. Harrison, 'Origins of the Bell Beaker culture', *Antiquary Vol. XLVIII*, 1974, pp. 99-109.

R. J. Harrison, "The Beaker Folk", London, 1980. なる注⑨～⑫・⑭文献は原典を入手できず、この書だけを内容を知りた。

⑬ J. Thurnam, "On ancient British barrows, especially those of Wiltshire and the adjoining counties", *Archaeologia Vol. XLIII*, 1871, pp. 285-552.

⑭ 前掲注⑩文献。

⑮ V. G. Childe, "The Bronze Age", Cambridge, 1930, p. 124.

⑯ O. Montelius, "Chronologie der Ältesten Bronzezeit", *Archiv. für Anthrop. Vol. XXV*, 1900, pp. 1-40, 459-511, 905-1012.

⑰ J. Palfiardi, 'Beiträge zur Kenntnis der Glockenbecher Kultur', *Wien. Praehist. Zeitschrift Vol. IV*, 1919, pp. 41-56.

⑱ A. Del. Castillo, "La cultura del vaso campaniforme", *Su Origen y extensión en Europa*, Barcelona, 1928.

本著のヨーロッパ起源説はカストロ・マヌエル・デ・ソウザ・H. Schmidt, ホンキニン・マ・P. Bosh-Gimpera 等によって論じられてゐる。前掲注④文献参照。

⑲ E. Sangmeister, 'Exposé sur la civilisation du vase campaniforme', *Les Civilisations Atlantiques, Actes du Ier Coll. Atlantique, Brest*, 1961, pp. 25-56.

⑳ J. N. Lanting, W. G. Mook and J. D. van del Walls, 'British Beakers as seen from the Continent', *Helinium Vol. 12*, 1972, pp. 20-46.

J. N. Lanting, W. G. Mook and J. D. van del Walls, 'C-14 Chronology and the Beaker Problem', *Helinium Vol. 13*, 1973, pp. 38-58.

㉑ 前掲注⑩文献

㉒ 中央ヨーロッパは器形に文様を加えた型式分類がすべてなされてゐた。

J. D. van del Walls and W. Glasbergen, 'Beaker types and their distribution in the Netherlands', *Palaeohistoria Vol. IV*, 1955, pp. 5-46.

㉓ 前掲注⑩文献。

㉔ 前掲注⑩文献でも、A O C・E・W \ M R, S₁ \ S₂を第一～七段階と呼び換えているが、それはこれら各型式が一連の変化をとげたものであると考へられたからである。

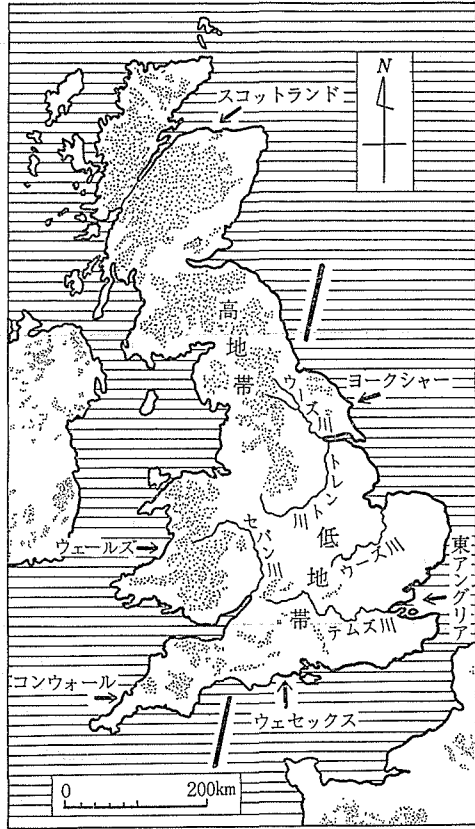
㉕ 注⑩前掲文献五頁～二三頁。

㉖ 前掲注⑩文献。

二 ビーカーの器種構成・編年・分布

本章ではビーカーの器種構成と編年と分布とについて検討するが、その前にまず本稿で用いているイギリスの地域区分名称について示したい。①

イギリスの最も基本的な地域区分は、西北部の高地帯と東南部



第3図 イギリスの地域区分
(梨地は標高 200 m 以上)

の低地帯の区分であり、それぞれをさらに小地区に分けることができる (第三図)。

高地帯は地勢が険しく、山地と森林と鉱物資源 (銅・錫) とに富み、スコットランド・ウェールズ・コンウォールの三地区に区分できる。

低地帯は農業牧畜に適した広い平野と緩やかな丘陵地に恵まれ、現在ではイギリス総人口の約八割が居住している。この低地帯は北部のヨークシャーを中心とする地方、東南部のテムズ川下流域

現われ、ウェセックス文化 *Wessex Culture* と呼ばれている。^③

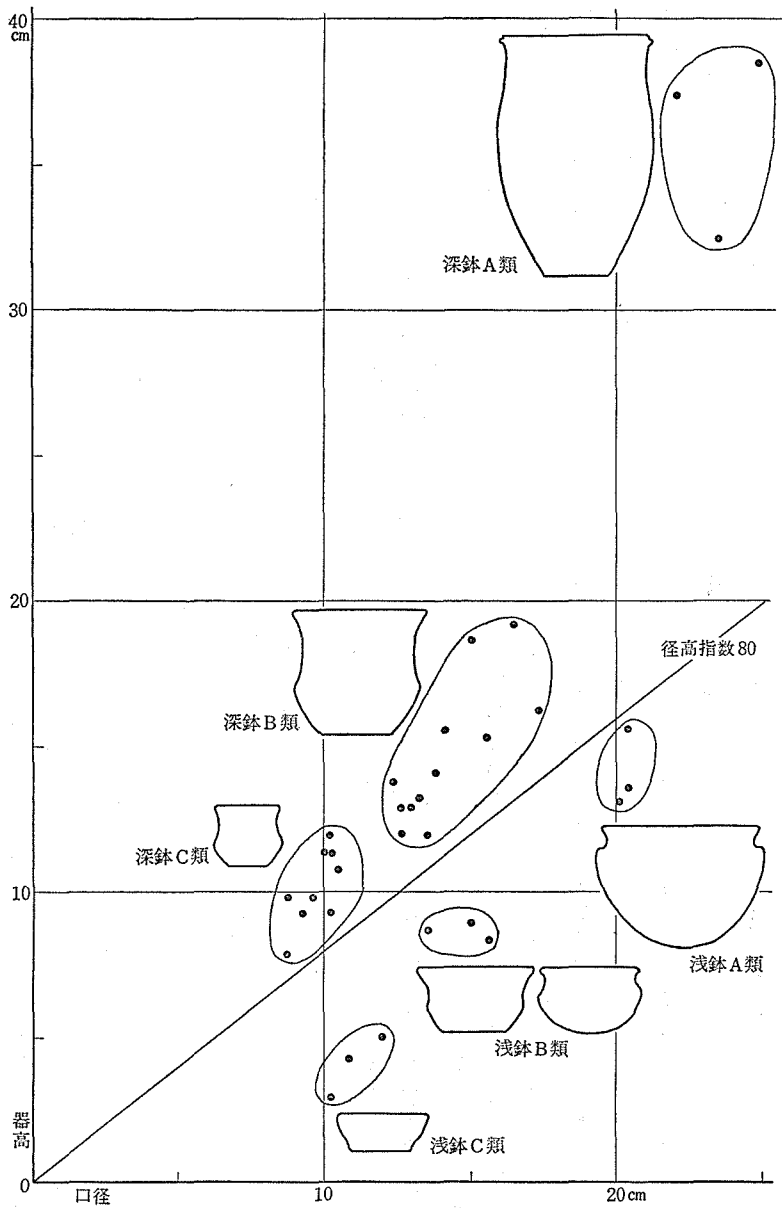
その基盤は当地が低地帯の中でも、特に農牧に適した平野と緩やかな丘陵地に恵まれていることにあるであろう。ちなみにこの地は後に七王国のイギリスを統一したウェセックス王家の本貫地であったことも、その農耕生産力の高さと、無縁ではなかったであろう。

(1) ビーカーの器種構成と文様・用途

ビーカーの器種構成を知るためには各時期毎の一括遺物を検討

を中心とする東アングリヤ地方、西部のソルズベリー平原を中心とするウェセックス地方の三地区に区分できるが、この中で特に注意したいのはウェセックス地方である。

ウェセックス地方の中心地にはストーンヘンジをはじめとする著名な青銅器時代の巨石記念物が営まれるばかりでなく、本稿でとりあげるビーカーはこの地域で変化を最も連続的にたどることができるといえる。またビーカーの新しい段階には特に豊富な副葬品をもつ墓が



第4図 ビーカーI期古段階の器種構成

しなくてはならないが、現在すべての器種を含む一括遺物を得ていない。そこで地域差が少ないビーカーの最も古い段階^④について、各地の資料から径高指数(器高/口径×100)を図化した(第四図)。

ビーカーは径高指数八〇を境にして、深鉢と浅鉢とに区別でき、それぞれを法量によって大きなものからA・B・Cの三類に細別できる。この器形と法量とから設定した六器種には施文に一定の差異があり、用途を異にしていたと推測できる。そこでまずビーカーの文様について概観した後、各器種について検討しよう。

なお文様の分析は文様構成

(器面区画と単位文様)の

検討が基本となるが、これらは次節に譲り、ここでは施文の原体と施文法を中心として述べることにする。

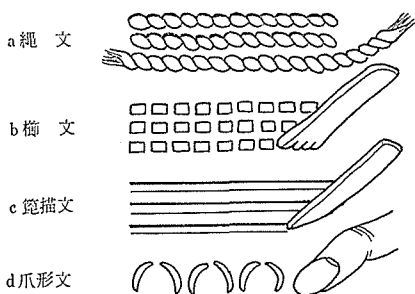
施文具と施文法 ビーカー

の施文具としては、縄・櫛

・篋・爪が代表的なもので

あり、他に棒状工具による

刺突文、おそらく鳥骨によ



第5図 ビーカーの施文具と使用法

と思われる円形刺突文等がある(第五図)。

縄文は、縄を横位に押圧した文様であり、回転施文を行なった例はない。この施文法は中央ヨーロッパ、新石器時代末の土器 Cord Ware の施文の系譜をひき、最古のビーカーに用いられる。

櫛文は、幅一〜五cmの櫛状工具を連続して押圧することによって施した文様であり、骨製の原体が知られている^⑥。波状文や扇状文のように器面上を動かして施文した例はない。櫛文は縄文と似た文様が得られ、より複雑な文様を描くのに適している。この櫛文による幾何学的文様が、ビーカー精製土器の代表的な施文である。

篋描文は、篋状工具による沈線文である。この施文法はイギリス新石器時代以来のものであり、ビーカー期にも少数存在する。そしてビーカーの終末期には篋描文が櫛文にとっかわっていく。爪形文は、親指と人差指を用いて施文したハ字状文が多く、このほかに指以外の原体を用いて施文した可能性のある連続爪形文の例も少数ある。ビーカー粗製土器の代表的な施文である。なおビーカー期の後半には、爪形より指頭圧痕がめだつものが、多くなる。

各器種の特徴と用途 先に設定した六器種について、それぞれの特徴を示し、困難ではあるが用途について推測しよう。

大型の深鉢A類は、口径二〇cm強、器高四五cmを中心とし、これよりやや小さいものもある。原則としてハ字状爪形文を施す粗製土器であり、口縁直下が屈曲したり、突帯をめぐらせるものが多い。クラークはこれを、蓋とした布または皮を緊縛する装置と解し、この器種が貯蔵用土器であることを示している。^⑦

大型の浅鉢A類は口径二〇cm、器高一五cmを中心とする丸底の土器である。おそらく煮沸を含む調理用土器であろうが、^⑧精製土器の文様を施すものがある。

中型の深鉢B類は口径一五cm、器高一五cmを中心とし、縄文や櫛文で最も華やかに飾る平底の精製土器である。この深鉢B類がいわゆる「ピーカー」にあたる。小型の深鉢C類も平底の土器であり、口径一〇cm、器高一〇cmを中心とする。無文のものとは縄文・櫛文を施すものがあるが、施文するものも深鉢B類よりはるかに簡単な文様構成をとることから深鉢C類は粗製土器に含めた。深鉢B・C類は飲物を入れる供膳用の土器であろう。

中型の浅鉢B類は口径一五cm、器高一〇cm弱を中心とし、平底と丸底とがある。精製土器であるものが多い。小型の浅鉢C類は口径一〇cm、器高五cmを中心とする平底の土器であり、無文の粗製土器である。浅鉢B・C類は食物を盛る供膳用土器であろうが、浅鉢C類には燈火器として用いたものもある。

以上のうち、供膳用土器についてみると、より大型の精製土器である深鉢B類・浅鉢B類を共用の盛器、より小型で粗製の深鉢C類・浅鉢C類を個人が用いる銘々器^⑨と解したところである。

ただし深鉢B類は有力な人が、地位を象徴する特殊な飲物を飲むための特別の飲器であるとする説もある。これに従うならば深鉢B類とおそらく浅鉢B類とは、特定の人の属人器となり、派生する問題は多い。^⑩深鉢B類は個人墓の副葬土器の主流をなすものであり、これが特別の属人器であったか、家族が共用した土器であったかによって、副葬の意義の解釈にも差異が生じるであろう。

これらをにわかに判断することは難しいが、ここでは深鉢A類は貯蔵用土器、浅鉢A類は調理用土器であるが共用の盛器を兼ね、深鉢C類・浅鉢C類は供膳の銘々器、深鉢B類・浅鉢B類は特別の人ないし特別の場合の属人器と推測しておきたい。

以上の器種構成において重要な点は、丸底の土器がイギリス新石器時代の土器の系譜をひき、平底の土器は大陸系土器であることである。

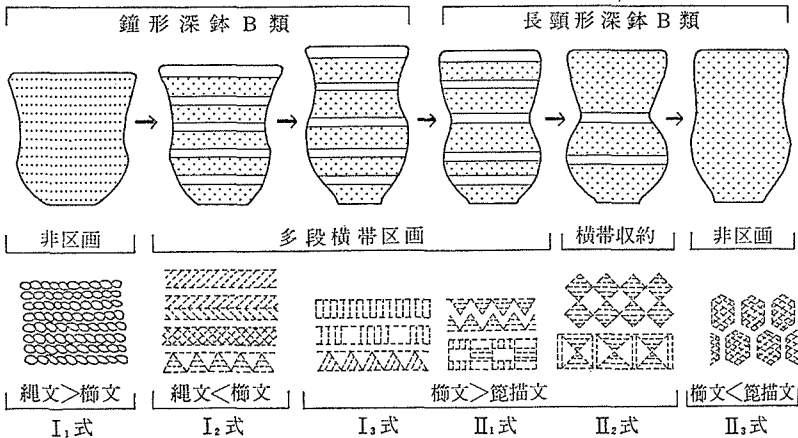
イギリス新石器時代の土器は丸底を原則とし、深淺に各種がある。^⑪これらには煮沸用土器、貯蔵用土器、共用の盛器と推測できるものがあるが、銘々器の存在は顕著でない。イギリスの土器の歴史においてピーカー期のはじまりは中央ヨーロッパの多様な器

種構成の土器の影響を受けた重要な画期とみなすことができる。また同時に調理用土器を中心として、在来の土器の系譜をひくくも存在することに注意したい。

(2) ビーカー深鉢B類の分類と編年

ビーカー深鉢B類は各器種の中で、器形と文様(器面区画・単位文様)の変化から変遷を最も細かく辿ることができる。ただし個々の土器についてみると、各要素が対応するものばかりではない。この点についてクラークは集成と分析の結果、器形が最も不安定な要素であり、器面区画がこれに次ぎ、区画に充填する単位文様の組合せが最良の編年基準となるとしている。私はこれを必ずしも否定はしないが、むしろ器形・器面区画・単位文様は相互に密接な関係をもちつつ変化したという側面を重視したい。すなわち各期を代表する典型的なものを中心として型式分類を行ない、その変化を理解することに重点をおくことにする。そしてそれからやや外れるものの位置づけについては一括遺物を検討する機会を得て行ないたい。

なお先述のとおりビーカー深鉢B類には、鐘形・長頸形・短頸形の別があるが、短頸形は高地帯、特にスコットランドを中心とする地域に分布する。本稿では低地帯を中心とする考察を行なうため、鐘形をⅠ式、長頸形をⅡ式として大別し、それぞれを細別



第6図 深鉢B類の器形・器面区画・単位文様・施文原体の変化模式図

することにする（第六図、第七・八図左端列）。

I₁式 器形は典型的な鐘形であり、口径と器高とがほぼ等しい。胴部最大径の位置が屈曲し、口頸部はゆるやかに外反し端部を丸くおさめる。器壁は薄く胎土は精良である。外面の全面に縄文を横位に施文し、口縁端部内面にも縄文を施文するものがある。なお、ごくまれに縄文が消えた部分を櫛文で施文しなおしたものがありI₂式との関係を示している。

I₂式 器形は典型的な鐘形であるが、器高が口径よりやや大きい。I₁式と同様に器壁が薄く、胎土も精良である。外面を三段以上の無文帯で四段以上に横位区画し、櫛文で平行斜線文、綾杉文、斜格子文、鋸齒文等を表わすが、これらの単位文様はI₁式に至るまで主流をなす。また口縁端部内面に施文するものがある。施文は櫛文がほとんどであるが、横位の区画と口縁端部内面の施文に縄文を残すものがあり、I₁式からの変化を辿ることができ

る。

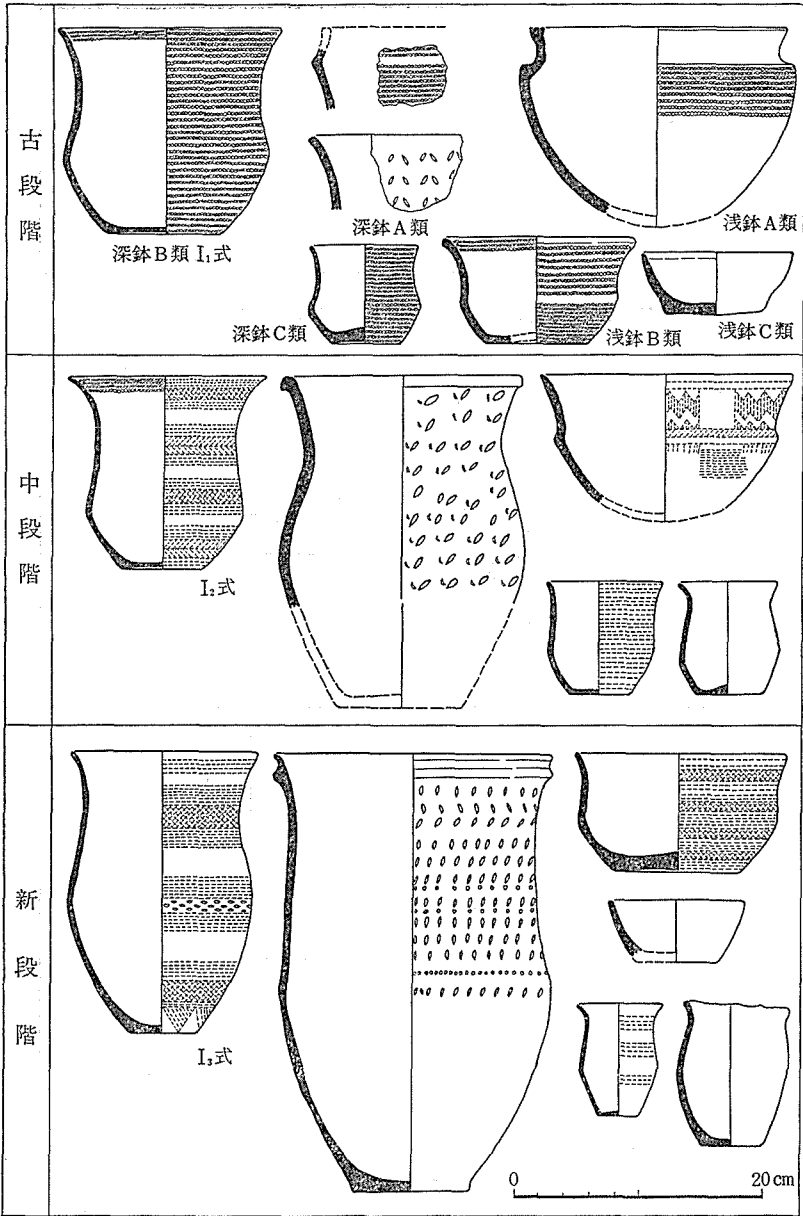
I₃式 器形は鐘形であるが、径高指数が著しく増し長頸形に近づく。それとともに器壁が厚くなり、胎土にフリント細片・砂粒等の混和材を混えるようになる。器面区画と単位文様とはI₂式と大きな差がないが、横帯内を縦方向に区画するものが少教現われる。また縄文の施文、口縁端部内面の施文は行なわなくなる。

II₁式 器形は口頸部と胴部の境がゆるやかな稜をなして長頸形となる。また口頸部はゆるやかに内彎し端部が面をなす。器面区画と単位文様はI₃式と大きな差がないが、口頸部の無文帯が明確でないものが現われ、相似た文様帯を組み合わせて、一見、幅の広い一つの文様帯にみえるものを用いるようになる事が重要である。また口縁端面に文様を施すようになる。なおI₁式の多くは焼成が良く、I₁・I₂式は暗褐色、I₃式は赤褐色を呈するものが多いのに対して、II₁式以後は焼成が次第に悪くなり黄褐色を呈するようになる。

II₂式 器形は典型的な長頸形であり、口頸部と胴部の境が明確な稜をなす。器面の横位区画は三段ないし二段と少なくなり、口頸部を一連の文様帯で飾るものが大多数を占める。単位文様は、広い面を充填するのに適した方格文を多用し、六角文も少教現われる。

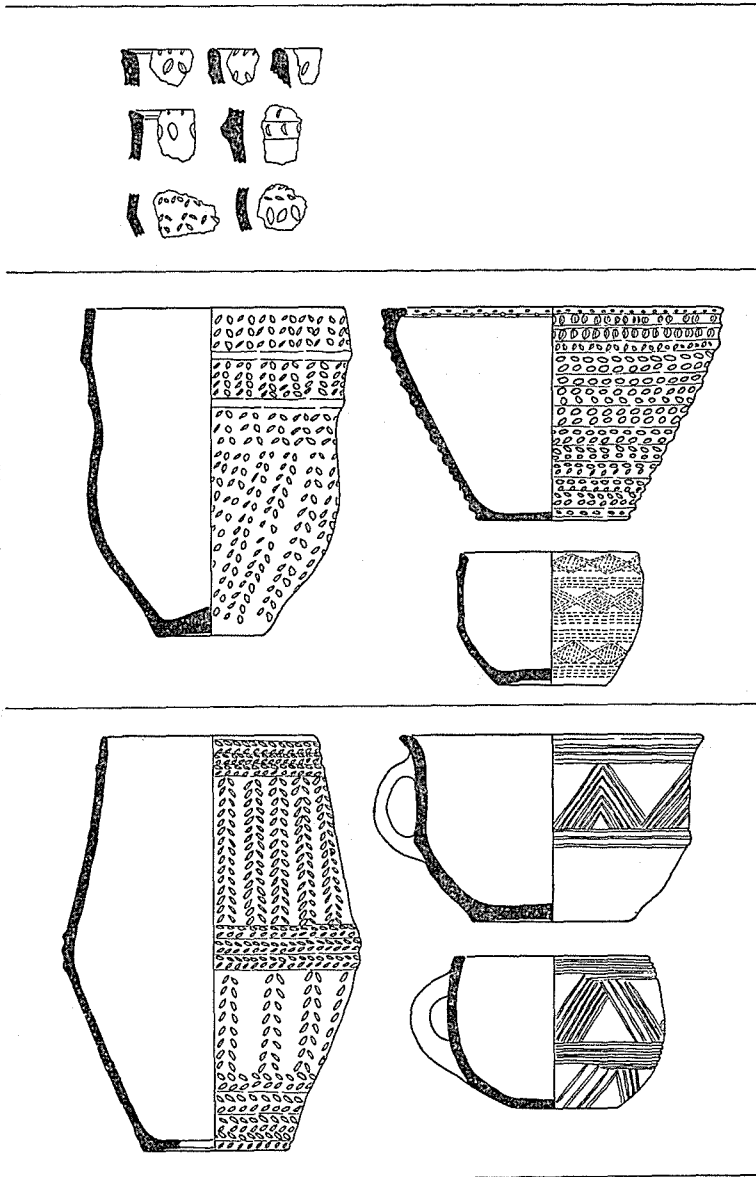
II₃式 器形は口頸部から底部に至るまで屈曲が弱く、器壁が著しく厚くなる。器面は区画しないものが多く、横位に区画する場合でも区画帯に文様を現わし、全面施文とするようになる。単位文様は六角文が主であり、文様構成は非常に簡素となる。また櫛文にかえて篋描文を多用するようになる。

以上のI₁～I₃・II₁～II₃式の変化を要素別にみると、器形は鐘形



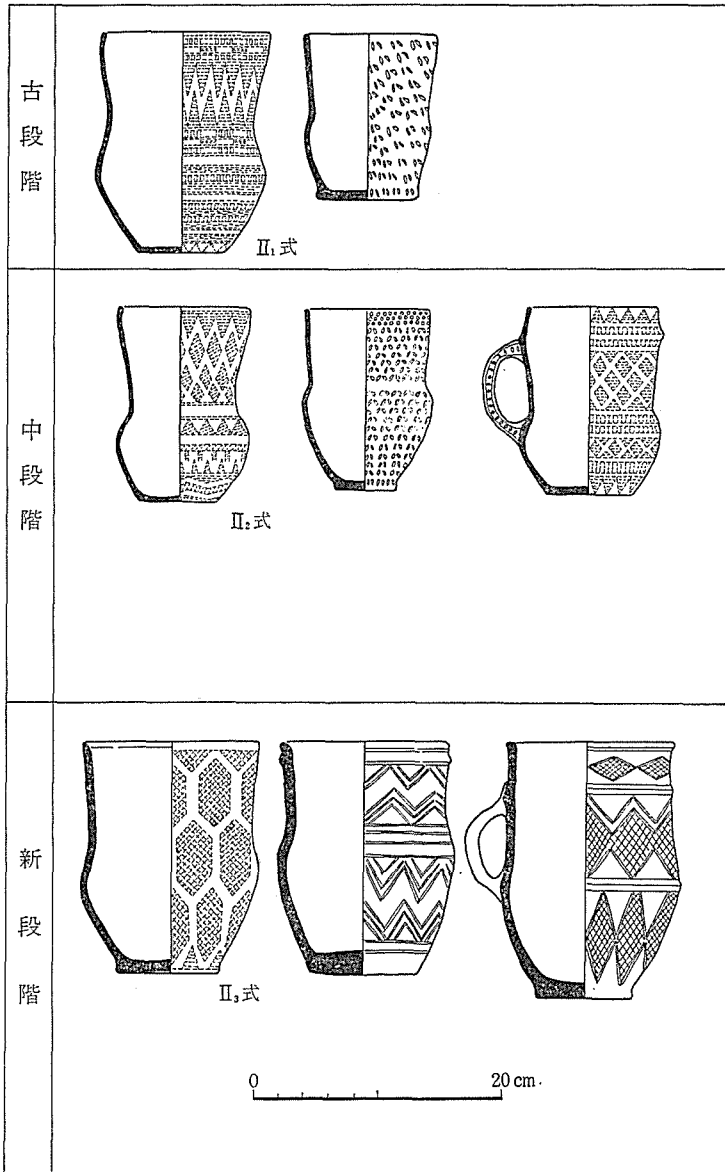
第7図 ビーカーI期の編年図

(縮尺1/6)



II 期の 編年図

(縮尺1/6)



第8図 ビーカー

から径高指数が増して長頸形へ、施文具は縄から縷、次いで篋へ、器面区画は横位全面施文から多段横帯区画、次いで横帯の収約へ、単位文様は横位縄文から、細い横帯を充填する文様、次いで広い面を充填する文様へと連続的に変化していったことが判る（第六図）。

そして器形における径高指数の増加と文様における多段横帯区画の採用とは密接な関係があり、器形の長頸形化と横帯区画の収約にも同様の関係があったであろう。そしてして判断するならば、上下にならぶ多段横帯区画の採用が径高指数の増加と長頸形化を生じさせ、反対に長頸形が確立すると、そのくびれた器形が横帯区画の収約をうながしたと考えたい。そして勿論、単位文様は器面区画の変化と対応して、幅の狭い横帯の充填に適したもののから、幅広の横帯ないし広い面を充填するのに適したものと変化しているのである。またI₁・I₂式では口縁端面面に施文することが多いのに対して、II₁式以後は口縁上端面に施文するようになることも、口頸部が外反する形態から内彎する形態に変化することと対応している。

以上のI₁・I₂・II₁・II₂式の変化は連続的なものであり、また先に示したようにI₁式の起源は中央ヨーロッパ西部の新石器時代末の土器 Local Corded Ware: Protruding Foot Beaker に求め

ることができる。このことからI₁式からII₂式へと変化したのであるが、その反対ではないことが判る。

(3) ビーカーの時期区分

以上で検討したビーカー深鉢B類の編年を基礎に、他の器種との関係を検討すると、^⑧他の器種は出土例の少なさもあって深鉢B類ほどには細かく変化を辿れないが、一定の対応する変化があることが判る（第七・八図）。このことから深鉢B類I₁・I₂・II₁・II₂式を指標として、ビーカー期をI期古・中・新段階、II期古・中・新段階の六期に分期したい。まずこの各期の深鉢B類以外の器種の変化をみておこう。

深鉢A類 I期古段階には口縁部が屈曲して内傾するものと、緩やかに外反するものがあり、口縁部直下外面に突帯を施すものも少量ある。施文は爪形によるハ字状文が主であり稀に縄文を施す。I期中段階以後は口縁部直下外面に突帯を施すものが多くなり、器形はI期新段階にかけて器高を増す。II期古段階の資料には器形が直線的で胴部で屈曲するようになり、屈曲する位置に文様帯を施すものが多い。青銅器時代中期の骨壺「E」はこの器種の系譜をひくものである。

深鉢C類 I期の深鉢C類は無文のものと簡略な施文のもの

があるが、深鉢B類と同様の器形変化を辿ることができる。Ⅱ期には深鉢C類の存在が顕著でなくなり、深鉢B類にハ字状文や窠描文を施した粗製土器が現われる。

浅鉢A類 Ⅰ期古段階には縄文を施した丸底のもの、Ⅰ期中段階には櫛文を施した丸底のものがあるが、Ⅰ期新段階以後は丸底の確実な例がない。Ⅱ期古段階には良好な資料がなく、Ⅱ期中段階にハ字状文を施した平底のもの、Ⅱ期新段階に窠描文を施したものがあ

る。浅鉢B類 浅鉢B類はⅠ期には口縁部が外反し、Ⅱ期には内彎する。そして施文も深鉢B類とほぼ対応した変化を辿る。

浅鉢C類 浅鉢C類は無文の粗製土器であり明確な型式変化を辿ることはできない。Ⅰ期にはかなり存在するが、Ⅱ期には確実な例がない。あるいはブドウ状杯 Grape Cup とされるものが、浅鉢C類に代わるのかもしれない。

以上の各器種の変化をまとめると、ビーカーⅠ期はⅠ期とⅡ期とでかなり様相を異にする。ビーカーⅠ期は、器種に多くの種類があり、土器の作りは全般的に丁寧である。また丸底と平底の器形が混在する。それに対してビーカーⅡ期は器種構成がやや簡素になり、土器の作りもⅠ期に比して粗雑化していく。また器形は平底に統一される。そしてこれらの諸点において、Ⅰ期新段階を転

換期とみなすことができるであろう。

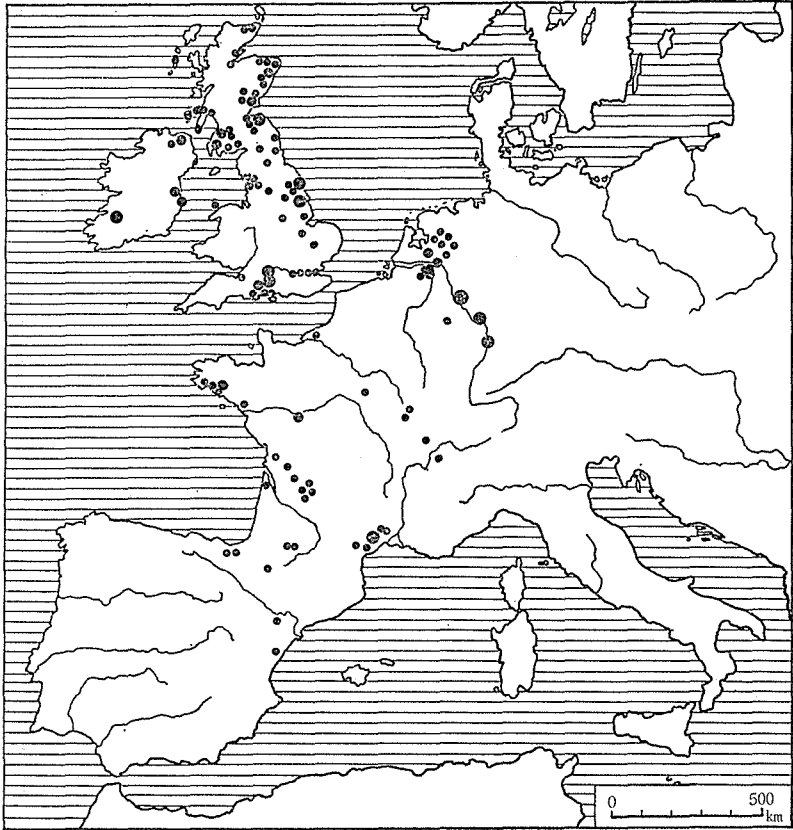
(4) ビーカーの分布

以上の各期においてビーカーはどのように分布するのであろうか。ここでは年代の判定が容易であり、報告例の多い深鉢B類を中心に検討することにする(第九一―一四図)。

Ⅰ期古段階 Ⅰ期古段階にはビーカーはオランダ・フランス・イギリス・アイルランドを中心とする地域に分布する(第九図)。この地域のうちビーカーの出現を連続的に把握することができるのはオランダ(ライン川下流域)であることはすでに示した。これ以外の地ではビーカーは非連続的に出現する。

Ⅰ期中段階 この時期にビーカーは分布を最も拡大し、西はイベリア、南はシシリ島・北アフリカ、東はポーランド・ハンガリー、北はイギリスのスコットランドにまで及ぶ(第一〇図)。ただし調理用の器種に着目すると新石器時代以来の地域差が存在することも忘れてはならない。また東ヨーロッパにおいては在地の土器に比してビーカーは例外的な存在である。

Ⅰ期新段階 この時期、ビーカーの分布は著しく狭くなり、ライン川中流域とイギリス低地帯に集中する(第一一図)。ライン川下流域とイギリス高地帯北部(スコットランド)とには短頸形のビーカーが分布し、鐘形ビーカーの伝統が最も強く残った地域

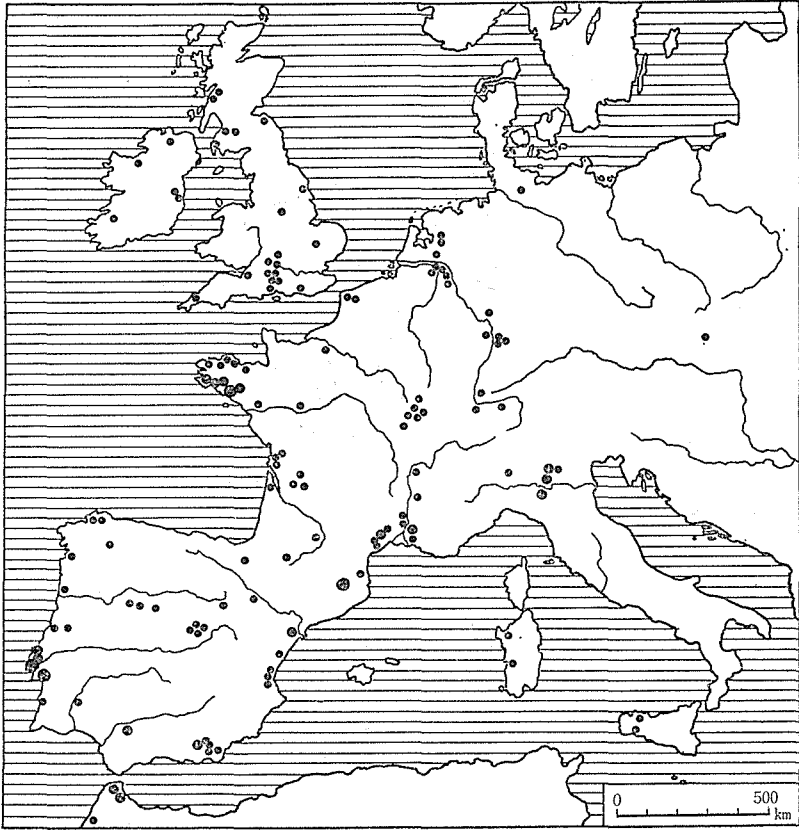


第9図 ビーカーI期古段階の分布

とみなすことができるが、その周辺においてはビーカーに長頸形化の傾向が現われたと解しうる。またこれらよりさらに周辺の地域では土器が無文化し、独自の地域圏を形成していく。なお金属器文化からみると、中心地は土器が無文化する中央ヨーロッパ中心部にあることにも留意したい。

Ⅱ期古段階 この時期、長頸形ビーカーの分布は最も狭くなり、イギリス低地帯にほぼ限られる(第一二図)。なおこの地域の中では、東海岸のヨークシャー地方・東アングリア地方に出土例が多い。

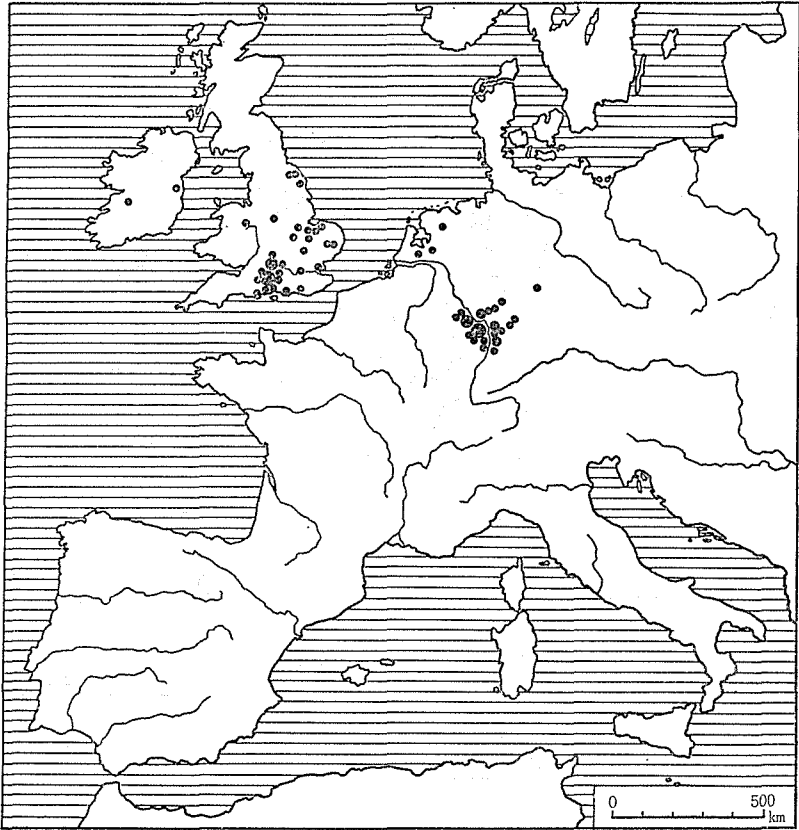
Ⅱ期中段階 分布の中心がイギリス低地帯にあることには変わりがないが、高地帯とアイルランドにまで分布が拡大する(第一三図)。またこの段階からウェセックス地方が分布の最大の中心地となり豊かな副葬品をもつ墓が営まれるようになる。



第10図 ビーカーI 期中段階の分布

Ⅱ期新段階 この時期にはアイルランド・ウェールズからの出土は知られていないが、北へはさらに分布を拡大する(第一四図)。そしてこの段階を最後としてビーカーの特質は失なわれ、粗製の青銅器時代中期の土器へと変わっていく。

以上からビーカーI期には汎ヨーロッパ土器圏が、Ⅱ期にはイギリスの地域的土器圏が形成されたことが判った。そしてこの分布の変化が何を意味するかを判断することは難しいが、イギリスに限り、本稿で検討しえた土器の個体数を計算すると、I期古段階が六三、I期中段階が七〇、I期新段階が二二四、Ⅱ期古段階が二〇七、Ⅱ期中段階が三三六、Ⅱ期新段階が一七である。ビーカーの地域色が顕在化するI期新段階は、おそらく衰退の時期ではなく、遺跡が増加し地域社会が確立した段階であるとみなすことができるであろう。



第11図 ビーカーI期新段階の分布

(5) ビーカーの暦年代

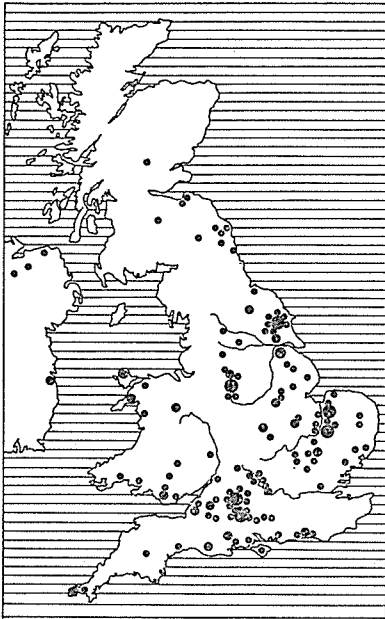
ビーカーの暦年代を検討する方法としてはビーカーに共存する青銅器による方法と、¹⁴C年代による方法とがある。

青銅器については次章で検討するが、結論を示すと、ビーカーII期中・新段階 Wessex Culture は、前一八〇〇年～一五〇〇年頃に比定される中央ヨーロッパのフウニェティン文化 Amjetitz Culture に併行する^⑩。このことから、ややおおまかではあるが、ビーカー期の年代を前三千年紀末～前二千年紀前半頃に比定しておきたい。

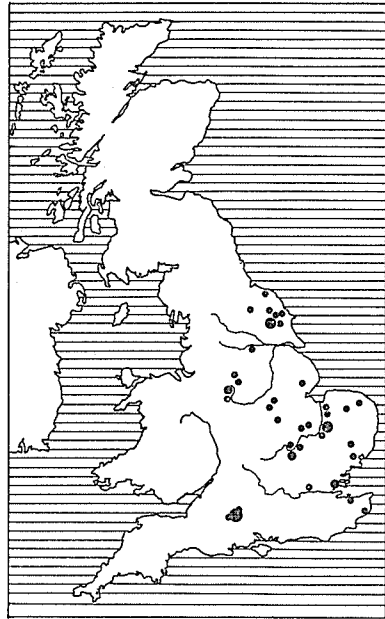
なお年輪年代による補正を行なった¹⁴C年代によるとビーカー期は前二六〇〇年～一七〇〇年頃の値を得る。¹⁴C年代については、相対年代が様式編年の結果とほぼ一致することに満足しておきたい。^⑪

(6) 小 結

以上でビーカーの様式と分布とについて



第13図 ビーカーⅡ期中段階の分布



第12図 ビーカーⅡ期古段階の分布

て検討し、ビーカー期は単一の時期ではないという結果を得た。ビーカーⅠ期は汎ヨーロッパ土器圏をなし、器種構成は多様であり、土器の作りは丁寧であるのに対して、ビーカーⅡ期には地域的土器圏を形成し、器種構成も簡素となり、土器も粗雑な作りとなる。これを単純化して表わすとⅠ期はイギリスが大陸の土器の強い影響を受けた時期、Ⅱ期は大陸の影響と在来の伝統とから新たな土器圏が成立した時期とすることができるであろう。そしてⅠ期新段階をその転換期とみなすことができる。

① イギリスの地域区分については次の二書に拠った。

J. M. Coles and A. F. Harding, "The Bronze Age in Europe", London, 1979.

D. L. Clarke, "Beaker Pottery of Great Britain and Ireland", London, 1970.

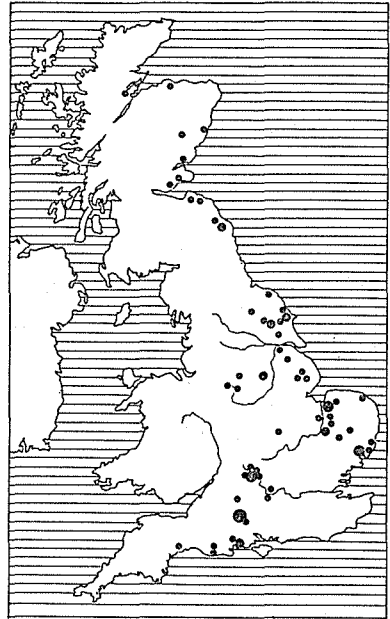
② ストンヘンジには三段階あり、第一段階が新石器時代末、第二・三段階がビーカー期に属する。

③ S. Pigott, "The Early Bronze Age in Wessex", Proceedings of the Prehistoric Society Vol. 4, 1938, pp. 52-106.

④ ほとんどの資料は後に述べるⅠ期古段階に属するが、深鉢A類については良好な資料が得られないためⅠ期中段階の資料を用いた。

⑤ 本稿で用いた資料の詳細(出土地、出土遺構、共件関係)は以下の三書を参照された。

H. J. Abernromby, "A Study of the Bronze Age Pottery in Great Britain and Ireland and Its Associated Grave Goods", Oxford, 1912.



第14図 ビーカーⅡ期新段階の分布

S. Pigott, 'The Early Bronze Age in Wessex', *Proceedings of the Prehistoric Society* Vol. 4, 1938, pp. 52-106.

D. L. Clarke "Beaker Pottery of Great Britain and Ireland", London, 1970.

⑨ D. L. Clarke "Beaker Pottery of Great Britain and Ireland", London, 1970, p. 10.

⑩ 注⑥前掲文献三六頁。

⑪ シュキン・ボール Cooking Bowl と呼ばれるものである。機会を得て煤の付着等の調査をしたい。本器種はイギリス新石器時代の土器の系譜をひきもつトレイタ式土器 Moltake Ware と呼ばれるが、ビーカーと共伴し、逆に中央ヨーロッパに特徴的な脚付浅鉢はイギリスで例外的な存在であるため、ビーカーの器種の一つとみなす。

⑫ 佐原真「食器における共用器・銘々器・属人器」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集、一九八二年。

⑬ R. J. Harrison, "The Beaker Folk", London, 1980, pp. 159-166.

⑭ 注⑥前掲文献で佐原真氏は現在のヨーロッパに属人器がほとんど存在しないことを示している。

⑮ S. Pigott, "The Neolithic Cultures of the British Isles", London, 1954.

⑯ 注⑥前掲文献五〇八頁。なおビーカーの単位文様は三〇種以上あるが、本稿では代表的なものの紹介にとどめる。

⑰ 共伴関係については注⑥前掲文献参照。

⑱ ビーカーⅠ期古・中段階は注⑩前掲文献、Ⅰ期新段階〜Ⅱ期新段階は注⑥前掲文献によりて分布図を作成した。

⑲ 注⑥前掲文献。

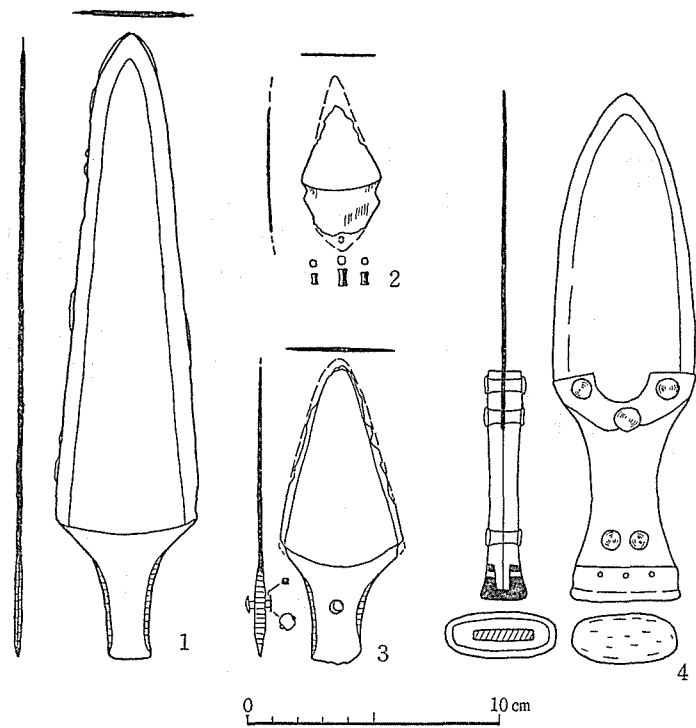
⑳ C. Renfrew, 'Wessex without Mycenae', *Annual of the British School at Athens*, No. 63, 1968.

㉑ C. Renfrew, "British Prehistory", London, 1974, pp. 223-225.

㉒ C年代が正しいならば、考古資料の編年網が違からずより合理的に正されるであろう。それまでは従来の年代観に従っておきたい。

三 イギリス青銅器時代のはじまり

前章においてビーカーの考察を行ない一定の結果を得たが、次に土器以外の資料がどのように変化したかを検討し、ビーカー期の位置づけを行ないたい。そのための資料としては、銅・青銅武器、石器、装身具、葬制、住居、農業・牧畜技術等がある。勿論これらを問題にするためには個々について詳細に論じなければな



第15図 銅・青銅武器

(1~3: ビーカーI期, 4: ビーカーII期, 縮尺1/3)

らないが、ここでは今知り得ることをまとめ、現在の時点での考
えを示すことにしたい。

銅・青銅武器 短剣が主要な金属製武器であるが、ビーカー期の

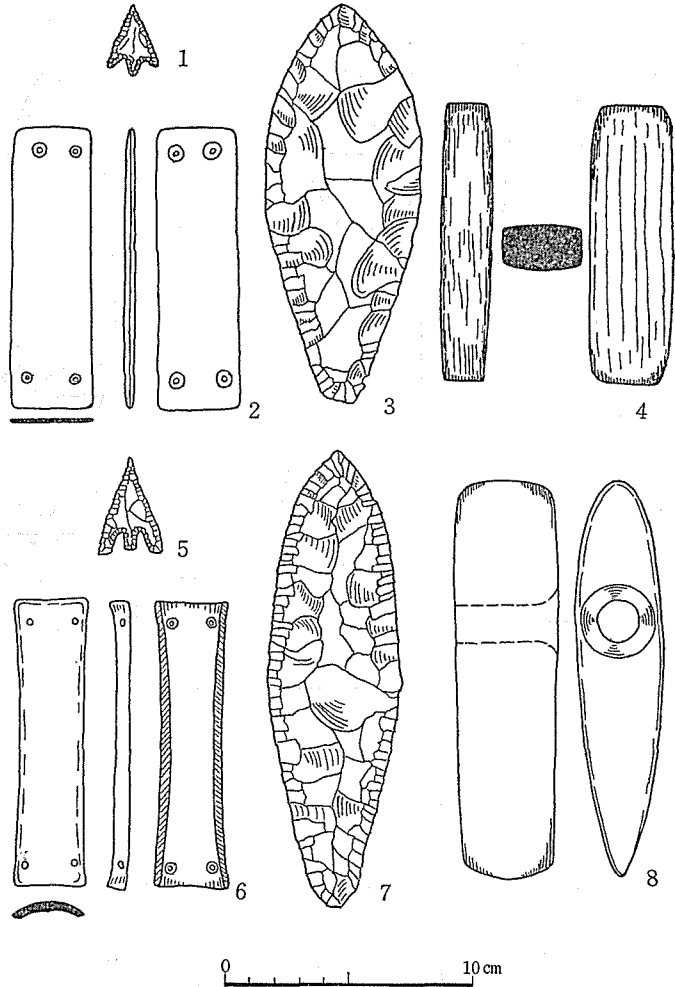
はじめには確実な資料がなく、ビーカーI期新段階以後に集中し
ている。有茎のI式剣と、茎がなく複数の鋌で把に装着するII式
剣とがあり、II式剣は剣身の形と鋌の数とによってさらに細別で

きる(第一五図1・4)①。有茎のI式剣はビーカー

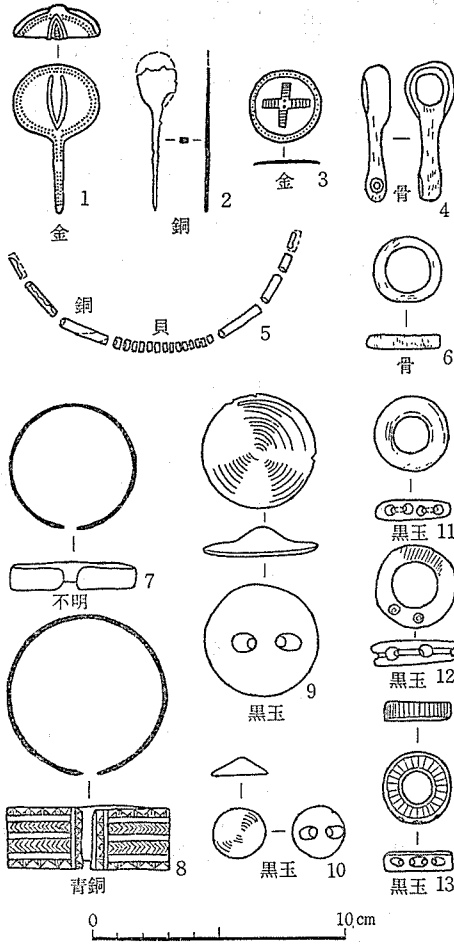
I期新段階に現われ、一つの鋌でとめる小型品を
伴なう②。ビーカーII期中段階には鋌留のII式剣と
なり同新段階へ続くが、重要な点はII式剣が中央
ヨーロッパのアウニェティツ文化 Aunjetitz Cul-
ture の青銅剣に一致し、ビーカー期の暦年代を
決定する資料となることであり、さらに注意すべ
きことはこの剣の起源は中央ヨーロッパを経て、
エーゲ・レバント・エジプトという東地中海の文
明社会に求められることである。なお分析例は少
ないが、I式剣は銅製品が多い。ただし小型の青
銅剣がビーカーI期新段階にあり、これがイギリ
スにおける最古の青銅器である(第一五図2)④。
また金属器の製作道具としては各種のハンマーが
発見されているが、クラークはビーカーI期古・
中段階の金属器は鍛造であり、同新段階以後に鑄
造製品が現われることを示している⑤。

石器 ビーカー期の主要な武器は弓であらう。ビーカーの出現とともに打製三角有茎石鏃が現われるが、イギリス新石器時代の石鏃は打製柳葉形であり、これは新しい型式である(第一六図1)。

そしてビーカーII期には、かえりが発達して先端が角ばるようになるが、ピゴットはブルターニュ地方との関連を指摘している(第一六図5)。また弓の道具である石製柄もあるが、これはビ



第16図 石 器
(1~3: ビーカーI期, 4~8: ビーカーII期, 縮尺1/3)



第17図 装身具

(1~6: ビーカーⅠ期, 7~13: ビーカーⅡ期, 縮尺1/3)

ⅠカーⅠ期新段階以後の例しか知られていない(第一六図2・6)。打製石剣はビーカーⅠ期新段階に銅剣とともに出現し、ビーカーⅡ期に続く(第一六図3・7)。中央ヨーロッパとの関連で重要な石製陶斧はビーカーⅠ期に確実な例がなく、ビーカーⅡ期に限られている(第一六図8)。なお墓出土の石器のほとんどは大陸系であるが集落からは新石器時代の系譜をひく打製石器類が出土する。

装身具 ビーカーの出現とともに金製耳飾が現われるが、これ

が現在のところイギリス最古の金属製品である(第一七図1)。このほかビーカーⅠ期には銅製ピン、金製ボタン外装具、銅・貝製の首飾、骨製帯留がある(第一七図2~6)。ビーカー期初頭に、ボタン・ピン・帯留・首飾という新石器時代にはなかった装身具のセットが現われることは、その所有者が服飾においては大陸風であったことを示している。ビーカーⅡ期中段階以後にはウエセックス地方で黒玉製ボタン・帯留が大量に製作され、また青銅製腕飾類が現われる(第一七図7~13)。

葬制 ビーカー期のはじまりは葬制における大きな画期である。イギリス新石器時代には火葬共同墓である長形墳 Long Barrow を営むが、ビーカー期になると横臥屈葬の土葬個人墓である円形墳 Round Barrow が主流となる。この新しい葬制が中央ヨーロッパの系譜をひくことはいままでもない。なおビーカー期の埋葬にはいくつかの種類があり、その年代と地域性の分析は重要であるが、本稿ではビーカーの出現が大陸の葬制の伝来と一致することを示すのにとどめておきたい。

住居 ビーカー期において住居が円形であるか方形であるかは非常に重要な問題である。なぜなら新石器時代にはイギリスは基本的に円形住居が分布する西ヨーロッパの地域に属し、中央ヨーロッパは方形住居の地域であるからである。ビーカー期の住居の発掘例は多くはないが、従来は高地帯を中心にして、壁柱ないし石壁をもち中心に炉をおく円形住居が知られていた。最近では低地帯において、環濠と土壘で囲んだ方形住居・円形住居・貯蔵穴からなる注目すべき集落が知られるようになったが、円形の住居が多いことには変わりがない^⑧。シンプソン D. D. A. Simpson は外来のビーカー使用民が在来の家屋の制を受け入れたと解釈しているが、住居と葬制とは対照的な動向を示す。

農耕・牧畜技術 ビーカー期には、エンマー小麦・パン小麦・大

麦・亜麻を栽培し、牛・豚・羊・山羊・犬を飼養した^⑩。この品目は新石器時代と変わりがなく、ヘルベック H. Helback は家畜の飼料となる大麦の比率が増大し、亜麻の本格的な栽培がはじまったことを示している^⑪。リネンと油の原料となる亜麻の増加はビーカー期における服飾の変化・燈火器の存在と関係するであろう。また青銅器時代を特徴づける犁耕は、新石器時代にすでに行なわれていた^⑫。しかし花粉分析によれば、新石器時代に顕著となった森林の開墾がビーカー期に著しく進んだことが知られている^⑬。農業・牧畜技術において新石器時代とビーカー期との間に大きな差異はないが、農牧地の開発の進展はビーカー期の発展の基礎として重視すべきであろう。

以上のようにビーカー期には土器の一部・住居・農業牧畜技術のように新石器時代の系譜をひくものと、新しく現われたものが混在する。このうち新しく現われたものに着目すると、土器におけるのと同様にビーカー期の初頭とⅠ期新段階に大きな画期があると見える。またウエセックス地方については、Ⅱ期中段階に大きな変化がある。これをまとめると次の通りである。

ビーカーの出現と同時に現われるものとしては、金属製装身具（金・銅）、打製三角有茎石鏃、横臥屈葬個人墓があり、特に葬制における中央ヨーロッパとの関係は、ビーカーの起源とあわせて

重要である。

ビーカーⅠ期新段階には有茎のⅠ式銅剣という大型の金属器が副葬されるようになり、その中には少数であるが青銅器が含まれている。また打製石剣も現われる一方、中央ヨーロッパの系譜をひく石製柄が副葬される。Ⅰ期新段階は、中央ヨーロッパとの密接な関係を保ちつつ金属器の副葬が本格化した時期である。

ビーカーⅡ期中段階以後は、ウェセックス地方の発展が著しく、中央ヨーロッパとはやや異なる玉製品・青銅器を豊富に副葬する墓を営むようになる。そして、この品目の中には、銚留のⅡ式銅剣という東地中海の文明社会に系譜をたどることのできるものが含まれている。この時期には、中央ヨーロッパとの関係も続いているが、独自の動向も生じてきている。

ビーカー期は以上のように、異なる内容の時期から成っている。そのため、ビーカー期のはじまりをもって青銅器時代とする説と、ビーカーⅠ期新段階ないし同Ⅱ期中段階から青銅器時代とする説^④がある。前者は金属器の出現と本格的な大陸文化の波及のはじまりを重んじ、後者は青銅器と鑄造技術の出現・普及を重視しているのであって、いずれにもそれなりの論拠がある。

私は青銅器時代という技術史の用語をできる限り社会の大きな変化に位置づけて用いたいという立場から、イギリスにおいては

ビーカーの出現を青銅器時代のはじまりとする考えをとりたい。またイギリスのビーカー期は、異なる様相の時期から成っているが、独自の粗製土器・青銅器・火葬墓に特色づけられる以後の時期と比較するならば、その変化は連続的なものとして理解できる。そしてビーカー期を青銅器時代前期としてまとめ、大陸文化の影響と在来の伝統とによって、そのいずれとも異なる青銅器時代中期文化を形成した過程として示すことが新石器時代以後の歴史を記述する上で最も有効であると考ええる。

① S. Piggot, 'The Early Bronze Age in Wessex', *Proceedings of the Prehistoric Society* Vol. 4, 1938, pp. 52-106.
S. Piggot, 'Abercromby and after: the Beaker cultures of Britain re-examined', *Culture and Environment*, 1963, pp. 53-91.

② 前章注⑤参照。

③ 剣身が三角形に近い形であり、銚留である点から、モンテリウス、ライネッケ編年の最古の段階に比定できる。このほかの多くの諸点からもビーカーⅡ期中・新段階 Wessex Culture がアウニエティン文化に併行し、ミケーネの影響を受けていることをピゴットが示している。注①前掲第一文献参照。なお、ビーカー中・新段階がウェセックス文化に併行することはクラークが明らかにした。前章注⑥文献参照。ただしウェセックス文化の最も新しい段階はビーカー期より新しいであろう。

④ H. Case, 'A Tin-bronze in Bell-beaker Association', *Antiquity* Vol. XXXIX, 1965, pp. 219-222.

⑤ D. L. Clarke, "Beaker Pottery of Great Britain and Ireland",

London, 1970, p. 264.

⑧ 前掲注①文献

⑦ 主体部の構造と方向、副葬品の配置、墳丘の形状に変化がある。また家族墓と推定されるもの、火葬墓も少数ある。

⑧ D. D. A. Simpson, 'Beaker House and Settlements in Britain, Economy and Settlement in Neolithic and Bronze Age Britain and Europe', Bristol, 1971.

⑨ 注⑥前掲文献一頁一頁。

⑩ R. J. Harrison, 'The Beaker Folk', London, 1930.

⑪ H. Heibek, 'Early Crops in Southern England', The Proceedings of the Prehistoric Society Vol. 12, 1952, pp. 194-233.

⑫ P. J. Fowler and J. G. Evans, 'Plough-Marks, Linchets and Early Fields', Antiquity Vol. XLII, 1967, pp. 289-301.

⑬ R. Bradley, 'A Pure Soil, Clearance and Colonization', The Prehistoric Settlement of Britain, London, 1978, p. 14.

⑭ V. G. Childe, 'The Bronze Age', Cambridge, 1930.

⑮ T. D. Kendrick and C. F. C. Hawkes, "Archaeology in England and Wales", London, 1932.

C. Burgess, 'The Bronze Age', British Prehistory, London, 1974.

なまはトットホウカーの出現期を画期として重視している。

S. Pigott, "Ancient Europe", Edinburgh, 1965.

⑯ 前掲注⑧文献。

L. M. Coles and A. F. Harding, "The Bronze Age in Europe", London, 1973.

なお、クラークもビーカー期古・中段階に青銅器がないことを重視している。前掲注⑨文献。

おわりに

——ビーカーを用いた人々——

本稿で述べたいことのほとんどは前章で示したが、最後にビーカーを使用した人々という難しい問題に触れて結語としたい。

ビーカーは土器そのものばかりでなく、特徴的な金属器、石器、墓葬を伴ない、ヨーロッパに広く分布する。このことから多くの考古学者は、その分布をビーカー族 Beaker Folk が起源の地から移動した結果生じたと考えた。またチャイルドはイギリス青銅器時代の人骨が新石器時代の人骨より短頭・長身であることを指摘し、それが中央ヨーロッパからの新来の人々であったことを正しく示唆したが^①、人骨の研究はさらに進展している。

ゲアハルト K. Gerhardt はドイツにおける鐘形ビーカー期の人骨 84 例を集成し、五群を識別したが、その中核になる人々は絶壁形短頭・長身・頑丈という特徴をもつことを明らかにした^②。そしてこの特徴について、男に顕著であり女には差異が多いこと、ビーカー期以前のヨーロッパや地中海の人骨との差異が大きく系統的にならないうこと、またこの新しい特徴をもつ人骨がイギリス・フランス・スペインにも分布することを示した。ただし中央ヨーロッパから遠ざかるにつれて、この短頭の人骨の比率が低

くなることも指摘されている。^③そしてビーカーの分布について、民族とはあまり関係しない土器のファッションの流行であるとするとする説もあるが、考古資料と人骨の研究成果からみるならば、やはりこの中央ヨーロッパに多い短頭・長身の人々が直接に重要な役割を果たしたのであり、かつその人々が西ヨーロッパの在来の人々を駆逐したのではなかったと考えたい。このことが汎ヨーロッパ土器圏が形成されても在地の新石器時代の系譜をひくものが存在し、まもなく旧来の地域的土器圏に別かれていく理由と思ふ。

それでは中央ヨーロッパそのものについては、縄文土器期とビーカー期の間土器において強い連続性がある反面、人骨において大きな変化があることをどのように解すべきであろうか。その解釈の鍵は新しい形質が男に顕著であることに求めうるであろう。

それではヨーロッパの地にとって外来の人々ないし外来の人々との混血の結果と考えられる短頭・長身の人々の出自は何処であり、彼等はどうのような社会的影響を及ぼしたのであろうか。疑問は次々に広がり、ヨーロッパ史の核心に近づいていくが、その点

謝辞 小稿をまとめる契機は、一九八〇年に「西北ヨーロッパにおける長形墳・円形墳の比較考古学的研究」現地調査に参加し、多くの関連資料に接しえたことにある。研究代表者の近藤義郎先生をはじめ、お世話になった都出比呂志、西村康、小林謙一、和田晴吾の諸先生に厚く御礼申し上げます。また小野山節・岡内三真両先生からは多くの有益な御教示を戴き、土器の見方については小林行雄・佐原真両先生と畏友泉拓良氏の学恩を深く蒙っている。記して感謝の意を表します。

については、この時期をウクライナ起源のインド・ヨーロッパ語族の到来、武器と装身具に身を固めた戦士貴族の出現として把え、アルプス以北のヨーロッパ中世社会の源流として位置づけるピロットの卓見を紹介するのにとどめ、今後の課題とした。

① V. G. Childe, "The Bronze Age", Cambridge, 1930, p. 153.

② 原典を入手できなかった R. J. Harrison, "The Beaker Folk", London, 1980. へ内容を知った。

K. Gerhardt, "Die Glockenbecherleute in Mittel und Westdeutschland", Stuttgart, 1953.

K. Gerhardt, 'Anthropotypologie der Glockenbecherleute in ihren Ausschwärmelandschaften', Glockenbecher symposium, 1976.

③ R. J. Harrison, "The Beaker Folk", London, 1980.

④ 前掲注③文献。

⑤ S. Piggott, "Ancient Europe", Edinburgh, 1965.

なお、この考えの基本は古くチャイルドが示している。
V. G. Childe, "The Aryans, A Study of Indo-European Origins", London, 1926.

M. Gimbutas, 'The Indo-Europeans: Archeological Problems', American Anthropologist Vol. 65, 1963, pp. 815-836.